

朝霧野外活動センター主催の初のオリエンテーリング大会が開催された。

2014年10月18-19日 静岡県富士宮市朝霧ナビゲーションパーク大会

朝霧ナビゲーションパーク大会

野外活動施設として先鋭的な活動を展開している朝霧野外活動センターは、学校団体やアウトドア活動者にナビゲーションスポーツの魅力を広めよう、これまでもロゲイニングやクイック0®やラビリンス0を実施してきた。そしてこの10月、同センター主催（静岡県オリエンテーリング協会と共催）の初のオリエンテーリング大会が開催された。

朝霧ナビゲーションパーク記念大会（略称：ANP大会）は、18日の全日本スプリント（スプリント選手権）と19日のロング大会の二日間で開催された。

世界標準にこだわったスプリント

18日はセンターの敷地および近隣の広大な草地の広場を利用して、選手権クラスは予選・決勝からなるレースが、一般向けには1本勝負のレースが提供された。

大会コントローラを務めたのは、世界選手権日本代表のコーチなども務めてきた吉田勉氏。吉田氏は、これまでも、ガラパゴス化しつつある日本のスプリントレースに強い危機感を抱き、世界で戦うための世界標準のスプリントの重要性を訴えてきた。その訴えをコースプランナー田島利佳氏が現実のものとしたのが、今回のスプリントだ。

予選では、特徴のない見通しのよい草原に、ただ直進するだけのレグがいくつも組まれた。予選は易しくし、スピードと実力のある選手が確実に通過できればよい。シンプルな狙いを持ったコースだが、実際に選手が走ってみると、ミスはしないものの、完全に視界が開けている中で他のコントロールに向かって走り出し、途中で方向修正をしたり、別のコントロールに着いて初めて間違いに気づく選手の姿も見られた。数秒が勝負を分けるスプリントという競技にあっては、こんなミスでも命取りになる。反対にそれにきち

んと対処できる選手が確実に予選を通過できる。それがスプリントのコンセプトだというのが吉田氏の主張である。

決勝では、簡単だが、常に用心深くルートチョイスをする必要があるレグが多数組まれた。スプリントでは、一般クラスの選手が観客となることは、もはや珍しくなくなったが、今回は、決勝出場選手が隔離された時間を利用して、吉田氏自らによるコースと観戦のポイントの解説が行われ、また全ての観戦者に観戦用地図も配布された。またレースがスタートすると、吉田氏が広場でレースの全体像を把握しながら、直にレース展開の見所などについての解説を行った。

当初予定していたGPSによるトラッキングこそ実施できなかったものの、「見る」という楽しみと「見られる」というスプリントならではの緊張感を選手に与えるイベントが提供された。



こんな見通しのいい場所でも、進路についてのちょっとした躊躇が生まれる。それが致命的になること、それがスプリントのコンセプトだ



出産後の復帰レースとなった皆川（左）を加納（右奥）が追うスプリントの決勝

各種イベントでオリエンテーリングの奥深さと楽しみを満喫

レースの後には、一般クラスの選手のために、決勝コースを走る機会が提供された。また有料（500円）で、吉田

勉氏によるワンポイントレッスンと夜の机上講習が行われた。スポーツなら、上達のために基礎的レッスンは不可欠だ。競技や練習の原理を学ぶことも必要になる。しかしコーチング制度が未発達な日本では、まだまだ体系的な練習や情報を提供できる機会は少ない。せっかく翌日に向けて宿泊することが可能な朝霧野外活動センターを利用した二日間大会なら、夜のゆっくりした時間にこれを提供したい。レッスンと机上講習はそんな思いから実現の運びとなった。

有料であったことから、参加人数は懸念されたが、始まってみればそれは杞憂となった。机上講習には40人近い参加者が得られたのだ。チェリー・ジョルジョの講義スライドなどを採用した吉田氏の講習内容もよかった。オリエンテーリングはもちろん、普段はロゲイニングなどに出る参加者にとっても、貴重な気づきが得られたに違いない。



コントローラでもある吉田氏による夜の机上の様。オリエンテーリング以外のフィールドナビゲーションのヒントとなる内容が惜しげもなく披露された

久しぶりの完全ニューマップ、富士山麓に登場

競技責任者・コースプランナー 小泉成行

2日目のロング大会はこれまで本格的なオリエンテーリングマップがなかった静岡の富士山西麓に新規マップを作成しての開催であった。数年前より朝霧ロゲイニングの運営に携わらせていただくようになり、このエリアがオリエンテーリングに適したよいテレーンであることはわかっていて、何より自分がここでオリエンテーリングをしたくて、優勝のチャンスを蹴ってでも全日本スプリントの運営に回り、ロングは参加しようかと悩むくらいであっ

た。渉外上の問題で利用できない場所も多いが、今回のトレインはまだまだ序の口。本当に素晴らしい場所がたくさん広がっているので長期的な計画で、少なくとも富士山が噴火してしまうまでは、このエリアでのオリエンテーリングチャンスを提供できればと思う。

地図については等高線間隔2.5mを採用した。見易さの点で選手からも賛否両論いただいたが、マッパーの西村君の努力もあって概ね好評ではあった。調査の過程で西村君は2.5mのほうが、進みが早いと言っていた。このエリアには精密な航空測量データがあり、かつこのあたりの地形は2.5m間隔であれば程よく表現しやすいサイズの地形が広がっているからか、調査原図がすでにオリエンテーリングマップに近く、作業が楽だからということであった。

一方で運営責任者の村越さんは2.5m間隔で仕上がってきた地図を見て、「5mの方が面白い」と言い出した。それは5m間隔のほうが、地図から『現実を復元』するのに多大な労力とスキルを要求する。」からということであった。そしてその復元する作業、地図から現地を想像することにナビゲーションの楽しみの本質があるのではないかと（このあたりの話はご本人からも話題提供があることを期待したい）。

果たしてどんな地図が公平で、どんな地図が楽しいのか。どちらをも追及しようとするマッパーはやはり偉大である。

他にもエリートクラスではワールドランキングや国内の成績を基に、有力選手が後半に固まるようなスタートリストを作成した。現行のシード制度では有力選手を離してスタートさせるこ

とが多いが、それは本当に公平なスタート制度なのだろうか。有力選手に囲まれた選手が幸運を手にもすることもままある。細かなことを言い出したら真に公平なスタートリストなど作ることはできない。であれば選手同士が干渉してしまうことも含めてオリエンテーリングだと割り切り、終盤にトップがめまぐるしく変わる演出面を優先してもよいのではないか、という理由であった。国際レースではむしろそういう場面の方が多く、若い日本代表選手からの要望もあり、それに応える気持ちもあった。

ちなみにこのスタートリストはもう1つの効果をもたらした。それは撤収時間が早まったということにある。有力選手が後半にスタートするということは、言い方は悪いが有力ではない選手は前半にスタートする。彼らは競技時間いっぱいかかってしまったとしてもまだお昼すぎ。後半の選手はきっちり優勝設定時間+数分のタイムで帰ってきてくれるのでフィニッシュ閉鎖時刻を過ぎて帰ってこない、という事態にはなりにくい。このスタートリストは演出面でも安全面でもよい効果があるように感じる。

この大会は ANP 構想を企画した朝霧野外活動センターの職員方が運営に加わっていただき、大変心強かった。これらの施設を“貸していただく”立場になることが多いオリエンテーリング大会だが、今後持続的に活動をしていくためには、拠点となる施設に売り込み、彼らを仲間にしていく取り組みも必要になってくるだろう。

(小泉茂行)

こぼれ話: 2.5m 地図から浮き彫りになった地図を読む力

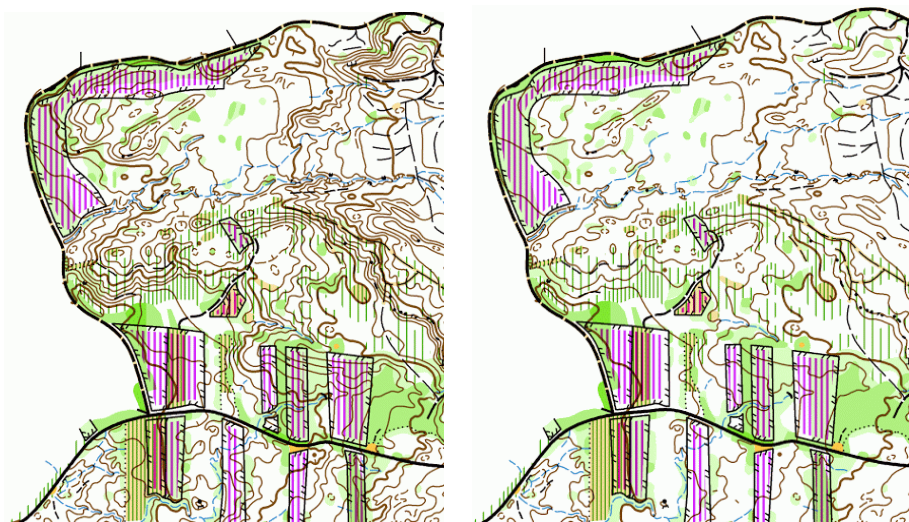
コースプランナーの小泉氏の文章中にある地図を見て、あなたはどちらの地図が分かりやすいと思うだろうか。ほとんどの人は2.5mの地図だと答えるに違いない。2.5m等高線の地図からは、このあたりの地形を作った溶岩の流れが容易にイメージできる。急斜面の部分を見ると、「ああ、ここで溶岩が盛り上がるように止まったんだな」なんてことも想像できてしまう。一方で、5mでは、そこまですつと地形のイメージはできない。地図に描かれた等高線の粗密に、「この地は溶岩でできた片斜面」という知識を援用して初めて地形の詳細な様子がイメージできてくる。つまり、そうした知識とスキルを持っている人へのみ、この地図は雄弁に語りかけてくるのだ。

それを面白いと感じたのは、やはり私自身が1:25000に近い地図でオリエンテーリングを始め、また最近では登山者向けに1:25000を中心とする地図による読図やナビゲーションを教えているからだろう。

興味深かったのは、調査者曰く、「実は2.5mの方が、手間がかからない」という点だ。今回は、原図として赤色立体とレーザー測量による1m間隔の等高線の原因図が用意されていた。2.5mの等高線間隔の方が、変換量が小さいからなのだろう。一方5mの等高線間隔というより高い抽象度の地図にするには表現すべき地形上の特徴を選び取り、間の多い等高線から具体的な姿がイメージできるように表現しなおして必要がある。だから通常の原因図作成とは異なり5mより2.5mの方が楽なのだろう。

5mでは地図の抽象度が上がっているため、具体的なイメージを作成するのに多大な努力が必要なのだが、それは調査者が、現物に近い赤色立体図と詳細な標高データから5mという抽象度の高い地図を作成により多くの努力を要求されるのは裏返しである。改めて地図の抽象度が利用者につけける課題を実感できた。

(村越 真)



左が2.5m間隔の等高線、右が5m間隔にした等高線 あなたはどちらがお好み？